

幼児の漢字教育は適時教育

私の提唱する“幼児の漢字教育”は、早期教育の一つだと思っている者が多い。また、英才教育の一つだと思っている者も多い。いずれも間違いである。英才教育は大切であり、必要だと考えている私だが、これは英才教育では絶対でない。早期教育に至っては、私は大反対である。その大反対の早期教育を主張するわけがない。教育は、遅すぎてもいけないが、早過ぎるのもいけないのである。教育には、その内容によってそれぞれを学習するのに最も適した時期があるのであって、それより早めて成功することはあり得ないのである。

幼児の漢字教育は適時教育なのである。幼児期が、一生のうちで最もやすやすと漢字が覚えられる唯一の時期であって、この時期を過ぎると漢字学習が困難になる。いま学校の漢字教育がうまく行かないのは、漢字学習の適時期を逸したためである。

ところが、この事実が今までの常識と余りにもがけ離れているので、多くの人がこの事実をなかなか信じない。自分が小学校や中学校で苦しんだ漢字が、幼児にやすやすと覚えられるわけがない、というわけである。

私を含めて、世の人々は適時期を外して漢字を学習して来た。だ

から、「漢字はむずかしい」と心の底からつくづくと思うのである。この「適時期を外すと、やさしいものがむずかしくなる」ということが、解りにくいので困る。

鈴木先生のバイオリン教育でもそうだった。まず、「幼児にあのむずかしい曲が弾けるわけがない」と言って否定した。ところが幼児が見事に弾くのをみると、今度は「幼児にあの曲が理解できるわけがない」と言って難癖をつけるのである。「大人にむずかしいものが幼児には容易に出来る」ということは、このように解りにくいのである。

鈴木先生は、ドイツ留学中、ドイツの子供たちがドイツ語を自由に話しているのを見て、その教育法を発見されたという。母国語の学習は、幼児期だからやさしく習得できるのである。成人してから学習するのだったら、外国語の学習と同じで、むずかしいものになるのである。

これも、「大人にはむずかしいものが幼児には容易に出来る」ことの一例である。しかし、これでもまだ「漢字学習は幼児期にはやさしい」ことが信じられないという方には、それを証明する徹底的な事実を披露しよう。それは、「幼児は、言葉がまだ覚えられないうちから、漢字は理解でき、覚えられる」ということである。